君と死ぬ

蟲メガネ

男と女

僕は、どうしようもなく彼女が好きだ、好きで、好きでたまらない。いっそのこと僕が彼女になってしまいたいほど好きだが、そんな事をしてしまったら、僕を好いてくれてる彼女が僕になってしまう、それは非常に芳しくない、ならばこのまま僕と彼女のままでいるしかないだろう。
そうだな、彼女の好きなところを具体的にあげよう。まず顔が好きだ、パーツであげるとキリがないので、言わないが、とにかく顔が好き。あと、体も好きだ、エッチな意味ではなく、美術的に見て美しいと思うから。とにかく、僕は彼女の全てが好きだ。むろん、性格も。

彼女の名前は「七海」という、とても爽やかないい名前だ。今は、僕の隣で栗色の色素の薄い短い髪を風になびかせ、何をするでもなく、ただ、ぼんやりと、空を眺めている、僕はそんな彼女を薄く視界におさめながら、彼女同様、風に吹かれて、空を見上げている。僕たち二人は、大変つまらない恋人同士だろう。キスだってした事ない、手だって繋いだ事はない、いつも肩を寄せあって、お互いの存在を感じるだけ、会話だってそんなにしない、下手したら一緒にいて一度も話さない事だってあるかも。しかし、それでも僕らはよかった、少なくとも僕はそれでいいと思っていたし、話す必要がないなら話さなくたっていい、手をつなぐ事も、キスも、二人が一緒にいる事のオプション、オマケのように感じていたから。そして今。こうしてゆっくりと風に吹かれていることは、とても気持ちが良い。肩に彼女の温もりを感じながら、穏やかな時間を過ごして、この上なく幸福、何よりも癒し。僕の日常で荒んで行きそうな心を洗ってくれる気がする、そんな恥ずかしい事を思い、一人おかしくなって、クスリと笑う、そして彼女に不思議な目で見られ、なんでもないよと目で告げる、そしてまたぼんやり。たまらなく、今が愛しくなってくる。
ふっ、と彼女がこちらを向いた。
「ねぇ、」
「うん。」
「私ね、君の事嫌いだよ。」
「僕もね、嫌い。」
「ふふ、一緒だ。」
「うん。」
「うそ。」
「知ってる。」
ふざけ合って、静かに笑う、僕と彼女、未来ある若々しい身体が、ただ、そこにある。

男と女2

人間とは恐ろしい、女の子はなんて怖い、男は時に無力と僕は知った。いや、正しく言えば、知識としては薄ぼんやりとはあった、しかしそれをむざむざと見せつけられたのは初めての事だった。
それは二学期の終わりのころ、12月。
僕と彼女は家がまぁまぁ近いので、付き合い始めてからは、ずっと一緒に学校に登校している、今日もそうだ。彼女はローファーをコツコツと鳴らし、寒さなど感じていないかのように、しゃんと背を伸ばして歩いている。反対に僕は、靴底のすり減ったスニーカーを履き、寒くてポケットに手を突っ込みながら、背中を丸めてだらしなく歩いている。
学校の玄関で、それぞれ別れ、それからクラスの友達と一緒に教室へと行く。
階段を登っているとき、ふと彼女を見上げるといつも、そりゃあ当たり前だが、スカートの中が少し見える。別に故意に覗いているわけでわなく、やらしい目で見ているわけでもなく、太ももという名に似つかわしくない、細ももが見えるのだが、それがまるで今にもポキリと折れてしまうのではないかと不安になるのだ。細すぎるというほどでもないのだが、その心もとない足で、体を支えているのかと思うと、なぜだか悲しくなるのだ。むろん、前にも言ったように、僕は彼女の全てが好きなので、その細い足ももちろん好きだ。

その日の昼休み、やけに廊下が騒がしく、僕は気になって廊下を見に行った。そこにいる人達は、廊下の一番端のクラス（1組）を覗いていた。そこで何かあったのか、それともその真っ最中なのかは分からないが、皆きゃあきゃあ言ったり、わあわあ言ったりしていて、その声には恐怖と、驚きの色が混じっている。僕はそこが彼女のクラスのなので、また帰りにでも何があったのか聞こうと思い、教室へ戻ろうとした。そのとき、僕の名前を呼びながら、まるで鬼のような、
と言ったら失礼だが、とにかく恐ろしい顔で女子が走ってきた。
「ヤバイよ…ほんとやばい！あのね、七海ちゃんがね…。」
息をきらせてやばいとしか言わない女子の次の言葉を無視して、七海、彼女の名前が出た途端、僕は人が群がるそこへ向かって走りだした。

グイグイと人をかき分けて、やっとその教室へ入ると、彼女が教室の真ん中に一人ポツンといて、その周りは人が避けて円が出来ていた。彼女は赤い手で顔をおおっていた。足元には猫の死体がごろりと転がっていて、その近くには、タオルで頭を抑えた男子が何人かに支えられていて…って、これを見ただけで、僕はとんと何があったのか分からないので、とにかく彼女に話しを聞く事にした
「七海は何をしたのかな？」
そっと手首をつかんで、顔を覆っている手をはずす。顔には手の赤がついていた。彼女はどうやら泣いていなかったようだ、それだけでもう何だかどうでもよかった。
「あいつ頭おかしいんだよ、猫の死体なんて鞄にいれてるからさぁ、途中で拾ったのか、殺した

のかは知らないけどね、私…ムカついたのかな？気持ち悪かったのかな？よくわかんないけどね、椅子で、あいつをね」
あぁなるほど。
「ガーンとやっちゃったわけですか。」
「うん。ガーンと。」

唖然だ。
観客に見守られる恋人、そして二人は苦笑い。

男と女3

なんとまぁ、僕の彼女は恐ろしいのか！！！それに驚くほど気持ちの良い言い方をするじゃないか！！！あぁ、もう大好きだ。こんな時に、こんな事を思う僕はもしかしたら変態か、でも仕方が無い、不覚にも、その潔さにときめいてしまったのだから。
もしかしたら僕はずっと前から気がついていたのかもしれない、彼女の中に潜む恐ろしさに。それに捉えられて僕は離れなかったのか、彼女を離さなかったのは僕ではなく、彼女だったのか。
恐怖で、僕の体はカタカタと震えた、と同時に彼女への愛に泣きそうになった。
「怖い？」
僕の気持ちが伝わったのか、彼女がそう聞いてきた。怖い、怖くない、いや、どっちだろう？分からない。
「七海、逃げようか。」
そう言って僕は彼女の真っ赤な手を取って、走り出す、人波がパカァと裂けていく。階段で先生とすれ違う。来るのが遅いよ、僕たち二人は逃げますので、では。おい！と先生の怒号を後ろに、階段を軽い足取りで降りる、降りる。学校を飛び出して、今度はお揃いの靴で、手をつないで、走っている、彼女と！

私は、彼らがいなくなったあと、一人で静かに泣いていました。彼いわく、鬼のような顔で走り、やばいばかり言う女です。彼と彼女の恋は、なんて美しいのか、痛々しいのか。私は涙が止まりませんでした。羨ましい、羨ましい、私だって、恐怖で彼を縛り付ける事ができるのに、なんで私じゃなくて彼女なんでしょう、そしてなんでこんなにも彼女が憎いのに、お似合いで、しかも美しいなんて思ってしまうのでしょうか。
私は一通り泣いたあと、ふぅ、とため息を着き、気持ちを落ち着かせると、あぁ、彼と結ばれなくて良かったな、と思いました。だって、どう考えたって、あんなに壊れてしまっている人なんて、私が支えられるわけがないでしょう？
彼女のとろとろとした、優しい恐ろしさに、彼はずっと包まれて生きて行くんだな、と思い、私はまたそっと涙を落としました。

彼女の手をぎゅっと握っていた事に気づいて、慌てて手を離した。
「痛かった？」
「大丈夫。」
また僕らは手をつないで、こんどはゆっくり歩き出した。あぁ、この道は前に行った、少し大きな林へ行く道ではないか。なんだ、無意識に…。さらさらと風になびく彼女の髪が思い出された。
林の中へ入り、少し奥へ行くと、12月のくせに晴れた空の下、なぜかある少しの芝生の場所が、

僕らのためのように、日に照らされていた。そこに二人座り込み、日があるのに寒い中、二人体を抱き合った。暖かかった。布越しに、小さく、けれど確かに彼女の鼓動を感じた。
そう言えば、手をつなぐのも、こうして抱き合うのも初めてだなぁと思い、存外、恐ろしい僕の彼女の小ささに驚い た。これが、女か。そのままそっと体を芝生に横たえた。冷たかった。そりゃそうだ。
二人見つめ合う。そこには、泣きそうな瞳があり、その中にもまた、泣きそうな僕の瞳が映っていた。彼女も果たして僕に同じものを見つけてくれているのだろうか。

恐怖と、愛と、熱と、涙と、それからなんだろう。決して交われない男と女の、死体のような身体が、寂しさで小さくそこにふるえていた。

犬と雌

我輩は犬である。猫が言うなら犬だってそう言いたい。
というわけでだ。俺は犬だ、間違いなく犬だ、ワンと吠えるし、猫よりも体が大きいし、お手も、おかわりもできる。そして俺は、ラブラドール・レトリバーという種類の犬だ、黒くて艶やかな毛が俺の自慢だ。からだの大きな俺は、身体の小さな犬と違って、散歩中に「可愛い犬ですね～、触っていいですか？」なぁんて、嬉しいお言葉をかけられる事は滅多にないが、時々ふっと言われた時の嬉しさと言っちゃあ、人間のお前たちにはわかるまい。そうだ、人間で言ったら、ものすごい男前や、ものすごい美女にナンパされたのと同じ気持ちになるかもしれない。ここで、男前やら美女と言ったのは、並の人間に声をかけられたら、ややイラっとくるだろう。そうだろう。喜ぶ人間もいるかもしれないが…。やはり人間にはわかるまい。

俺の飼い主は、24歳のとても綺麗な女の人だ。女の名前は、「ヤエ」と言う。ヤエはいつもタバコを吸っていて、縁側に座って俺の相手をしたり、眠ったりしている。この家は、元々はヤエのおじいさんの家だったらしい。人間の大人は、仕事をするらしいが、ヤエは多分何かを書いているのだろう。時々長く部屋にこもって、出てこなくなる。もちろん、餌を忘れる事はないが、それでも、餌を用意したらすぐにまた部屋にこもってしまう。
ヤエはとてもクールな女だと、この前家に来た年を取った男がそう言っていた。クールの意味はイマイチよく分からないが、ヤエはとにかく、さばさばとしていて、憧れる、そんな女らしい。俺はヤエが、そんな女だと知って、あぁ、嘘つき女め。と思った。ヤエは意外にも、粘着質だ、ダラけた生活をしていて、俺がわんと一喝しなければ、次の行動にうつさない時だって多々ある。いつだったか、ヤカンが切ない声を上げてヤエを呼んでいるのに、無視し続け、挙句煩いねぇ。などと、ヤカンが可哀想だ。
そう、俺はヤエの事をよく知っていた。俺は人間に劣る所はたくさんあるが、これだけは他の人間には負けないだろう、ヤエの家族にだって負けない自身がある。
ヤエは俺に心を開いていた。ひどく開放的で、全てをさらけ出していた。俺とヤエはただの犬と飼い主ではなかった。ヤエは「お前は人間のなり損ないだよ。」と、いつもと言っていいほど頻繁に、そんな言葉を俺に投げる。散歩の時は、横にしっかりと並んで歩くのは嫌だ、男はリードするものだ、と言って俺を少し前に歩かせる。

だからだろうか、そんな事をするから、犬である俺は、不覚にも、ヤエを愛してしまっていたのだ。これが世に言う世界一叶わない恋であろう。人間同士でそれを言うには、実に甘っちょろい。

であるからして、だ。俺がヤエを愛してしまったのは仕方のない事だと、諦めるしかない。それに俺は犬だ、人間の男には叶わない事は知っている。だけれども、ペットならどうだ。きっと彼女なら、生涯ずっと俺だけを思ってくれるだろう。ヤエは変わりを何かで埋める、そんな女ではないと、俺は知っているんだ。家にあるものはみんな古い。壊れたって無理矢理にでも修理して使う。ただ買いに行くのが面倒くさいのだろうとも考えられるが、とにかくヤエは大事にしてくれる。
そう確信できる人の元にいるのは大変心地がいい。無駄な不安に駆られる事もなく、ただ穏やかに毎日を過ごせばいいだけだから。

ある雪の日の事だ。ヤエは帰ってこなかった。そんな日は必ず俺に一言いって行くのだか、今日はそんな事は聞いていない。まぁ、ヤエの事だ、何かあって帰れないんだろうと、まどろみ始めた中で、思った。
しかし、次の日もヤエは帰ってこなかった。俺は前にも一度こんな事があった、そういえばあの時は、ヤエはどこかで迷子になったらしい。俺は空腹をぐっとこらえて、寒さにくう、と鼻を鳴らした。
おかしい。もう4日経った。ヤエが帰ってこない！酷い空腹だが、それよりも、ヤエが、帰ってこない方が俺にとって一大事だ。どうしたのだろう、ヤエはとうとう俺を捨てて、遠い所へ行ってしまったのだろうか。もしかしたら、男と暮らすのに、俺はジャマになってしまったのか。あぁ、ずるいずるい、人間の雄は何とずるい。俺のヤエを、いとも簡単にさらってゆくなんて。まだそうと決まったわけではないが、俺の頭のなかは、絶望。ただそれだけだった。

人間だったらどれだけよかっただろう。涙の一つでも流せたのに、大きな手と長い腕でヤエを抱きしめられたのに、何より、ヤエに…彼女に一番に想ってもらえたかもしれないのに！！
わおーん、わおーん。と俺は切ない声を上げた。さよなら、ヤエ、と。
俺はとても怖いよ、君がいないなんて考えられない。
俺は初めて、犬でなければよかったのに。と、強く心から思った。

犬と雌3

なんという事をしてしまったのか。私は、家に帰り、庭の大きな犬小屋ででくうくうと鼻をならして寝ているはずの、彼を見た。冷たい雪の上に、体を横たえて、死んでいる。白に黒はよく映えるなぁ、と自分でも驚くくらい、のんきな事を考えた。
そんな場合ではない、一週間前まで生きていた、私の可愛い犬が、死んでいるのだ。静かに、まるで生きているかのように、いつもの姿でそこにいるものだから、悲しいのに、泣けない。
もしかしたら寝ているだけかもしれない、とは考えなかった。ずっと、一緒にいた私が、分からないはずがない。 私は雪をざくざくと怒りにまかせ踏みつけ、彼のもとへゆく。触ってみると、やはり彼は冷たかった。命は、もう、ないのだ。

私は、彼の事がとても好きで、人間は嫌いで、でも、おじいちゃんは好き。だから、大好きなおじちゃんが住んでいた家で、大好きな犬と二人で、穏やかに暮らしていた。私は作家をしていた。あんまり有名ではなかったけれども。それでも物語を書く事は楽しかった。それだけで足りないお金は、内職でまかなっていた。自分で言うのもあれだか、私はかなり仕事が早く、その質もいい。だから作家と内職を両立する事は難しい事ではなかった。
それに、私はモテる。顔もスタイルも文句なしにいい。だから、この腐った中途半端に栄えた田舎で、私はとても目立った。ポストに手紙が入っている事もあった。最低だとは思うが、お金に困った時は、少しだけお金を借りたりしていたのだ。それはもちろん、きちんと返していたけれども。私はこの生活が嫌いではなく、むしろ好きだった。

そして今日までの一週間、東京にずっと閉じ込められていたのだ。迷子になったわけではなく、仕事で日帰りのつもりで行ったのだが、たまたま一緒に飲んだ男が、私を帰してくれなかったのだ。私は早く彼の元に帰りたかった。艶のある、硬く黒い毛に、そっと顔をうずめて、その匂いをかいで、ぬくもりを感じて、縁側に彼を上げて、そしてまどろみたかった。なのに、どうした事か。
男を殴ってでも帰ってこればよかった。私の彼はとても強いから、大丈夫。などと、なんでそんな事を。

所詮はペット、ただの犬なのに。
私は、彼の黒い美しい死体のそばに、腰を下ろした。ジーパンには、すぐに雪の冷たさが伝わり、私の下で溶けた雪が、じわじわと下着まで濡らした。着ていたコートで、彼の体を包み込んだ。身体の大きい犬なので、まるで犬用の服を着ているようで、とても愛らしかった。
「ごめんね。」
私はふふ、と笑って、彼の身体にそっと身を寄せた。雪がとても冷たく、それと同じくらいに彼も冷たく、けれども私は確かに息をしていて、緩く体を燃やし、熱があるというのに。

それはまごうことなき、生であり、確かな死だった。

縁側の下で、小さくつくしが芽吹いているのが見えた。もうすぐ春がやってくる。そしてまた、冬がやってくるのだろう。いくら季節が巡っても、私の中で芽吹く事のない人間への愛と、溶ける事のない彼への愛。
私はそれがあった事を、確かに覚えているだろう。
雪がチラチラと降ってきた。

いっその事このまま、彼と共に眠ってしまおうか。私は静かに目を閉じて、離れるものかと、彼の体をきつく抱きしめる。もうあまり冷たいとは感じず、早く雪が私たち二人を覆い隠してはくれぬものかと、もう一度ふふ、と笑ってみた。

次に目を開ける時は、春だろうか。

男子と男

ここは私の屋敷。誰も邪魔される事なく、悠々と暮らしている。私、というのは女性の一人称でもあるが、男性にも用いられる事を忘れてはいけない。
もちろん普段は私、などと言わないが、なんとなく、気分というやつだ。
ところで俺は世にいうゲイだ。男が好きなのだが、自分でも大変気持ちが悪いと思う。ここまで言い切ればいっその事清々しいのではないか？女の子はふんわりしていて、いい香りで可愛いと思うが、それがどうにも小っ恥ずかしくて苦手なのだ。
だから俺は、男が好きだ。だからと言って、ガッチリと筋肉のついたのが良いと言うわけでもなく、ひょろりとした女性的なのが良いと言うわけでもなく、どうと言われれば、いわゆる細マッチョが好きなのかもしれない。これは体型的な話において、だが。

そして俺は先ほど自分の事を主と言ったが、これは嘘だ。少しだけの嘘ではなく、かなりの嘘だ。本当の主は俺の父親なのだが、今は海外へ長期出張に行っているのだ。母親は大分昔に、仕事を愛しすぎている父に愛想をつかして出て行った。俺はそんな父を少しだけ情けなく思いながらも、大いに尊敬していた。お金のためではなく、本当に好きで今の仕事をやっている父が、とても誇らしい。
話を戻して、俺は先ほど自分をゲイと言った。確かにゲイだ。だから俺は毎日、この目の前にいる男をどうにかして手中に収めようと奮闘するが、あの手この手でかわされてしまうのだ。つまりは、俺より一枚上手だと言う事だ。彼は俺の世話を昔から見てくれている3つ上の、兄的存在の人だ。
残念ながら、彼は俺の事を昔からひどく嫌っている。俺ももうそろそろで嫌いになりそうな、そんなところでギリギリ好きなのだ。

俺は、彼をよく殴り、彼も、俺をよく殴る。大抵は俺が喧嘩を売ってしまう。大抵はと言わず、九割は俺かも知れない。俺は彼を殴ればそれで気が済んで、一人で何処かへ行ってしまうが、彼は違う。彼は俺の事を嫌いなくせに、俺の事をめちゃくちゃに殴った後、痛かっただろう、辛いだろう、そう言って俺を泣きながら抱きしめるのだ。
全くもってわけがわからず、それがまた、堪らなく愛しくて、だからか俺は彼の事がギリギリ好きなのだ。自分でも呆れるほどに、馬鹿らしい。

学校から帰ると、彼はリビングでゆっくりとテレビを見ていた。家事の出来ない俺のために、彼はここに住みこんで面倒を見てくれているのだ。
「ただいま。」
「おかえり。」
一日の会話は挨拶だけ。後はほとんど話さない。俺はそれが、いつも少しだけ寂しく感じる。
「あのさ、話しあるんだけど、いい？」

珍しく、彼が俺に話しかけてきた。どうせろくでもない内容だろう。と、俺は心の中でぐっと身構えた。

男子と男2

彼は俺を横目でチラリと見て、抑揚のない声でこう言った。
「俺を、この家から出してくれ。」
と。何を言っているのかわけが分からなかった。だってそうだ、彼はずっと俺の面倒を見るはずで、昔からそうで、そんなの今更おかしいじゃないか。離れるなんて、無理だ。
「俺は自分で生きたい。」
彼は、嗚咽混じりの声でそう言った。なんでお前が泣いてるんだ。それなら、俺だって泣くぞ。

あぁそうだ、俺は彼の人生を奪ってきた、屋敷にずっと閉じ込めて、俺のそばにずっと置いていた。これじゃあ嫌われても仕方がない。今更気づいたところで無理だったのだ。彼の心はずっと前から、彼から離れていたのに。

不毛な恋だ。

俺は涙をぐっとこらえ、今にも泣き出しそうなはずなのに、「じゃあさ、俺のお願い聞いてよ。そしたら、諦めるから。」と、彼を抱きしめて言ったのだ。最後の最後まで、俺はこれを縛り付けてしまうのか。なんだか、彼がとても不憫に思えた。一体誰のせいだ、俺のせいだろう？
「いいよ。最後だから。これで、終わり。」
「終わり。」
俺は彼の言葉をそっとなぞった。初めてキスをした。しょっぱかった。レモンだとかイチゴだとか、そんなフルーティーなものではなかった。人の体から溢れ出す、海の味がした。たしかに、人は海から来たのだと実感されられる。その味をもう一度確かめようと、また口付ける。
ぞっとした。
怖かった。
もしかしたら彼は海へ帰ってしまうのではないかと思った。柔らかく、口付けたまま、離せなかった。

それから、俺は彼を抱いた。彼はずっと声を上げて泣いていた。甘い鳴き声ではなく、こちらの心まで引き裂かれてしまうような、本物の泣き声だった。彼の中に、自身を入れると、彼は少しだけ、甘い声をあげた。ゆっくりと、確かめるように、俺は動いた。まだ、離れたくない。嫌だ。好きだ。ゆるゆるとした快楽は、俺も彼もいかせる事なく、ただずっとそこにくすぶっていた。
「ねぇ…早くしてよ、もう、嫌だよ…。」
しばらくして彼は、やや収まった涙を手でぬぐいながらそういった。

あまりにも、それが、早く俺と離れたい。と言っているようで、辛かった。
あぁ、ギリギリ好きだなんて、なんて事を…。こんなにもしっかりと愛しているのに。
「死ね。」
俺は彼を突き刺した。突き刺して、突き刺して、これでもかと言うほど奥深くへのめり込んだ。このまま腹上死させてやろうか、息が出来なくて死んでしまえ。彼はもう、泣いているのか鳴いているのか、分からなかった。

俺は、静かに泣いていた。

男子と男3

そうして、事を終えて、それでもまだ俺は彼の中に入っていた。彼は俺の髪を梳いて、ゆっくりと呼吸をしていた。
「まだ殴られたほうがマシだね。」
そう言って、彼はクスリと笑った。あぁ、もう本当にこれでお別れなのかと思ったら、俺の目から涙がまた流れて来た。
「お前さぁ、本当に俺が好きなんだね。凄いよ、ほんと…。マジで、ドン引きするくらい…。」
ふ、は、は、と俺は途切れ途切れに、無理に笑ってみせた。彼の中が、生温くなってしまっていたのに気付いた。

言ってはいけない。 言ってはいけない。

互いの抱えてる秘密を、俺はとうの昔から知っていた。

俺を貫く恋情と、 俺が彼に与える親の愛と。

俺はどちらも知っていた。 まだ若き少年には言えなかった。

たった3つだ、それだけの壁だ。 それだけしか俺たち二人の間にはなかったのに。

熱をなくし、ぬるくなった彼を受け入れながら、頭のほんの隅っこで、そう思った。 俺は、全く彼の事を恋愛対象として見ていない。彼が思うように、俺は彼が嫌いだった。怖かった。 彼から俺は、いつか離れていく。離れなければいけないのだ。親の愛を俺は、彼に静かに与えていて、俺が彼からもらうのは恋情で、これは真におかしな話だろう？ 彼が手放せなくなる前に、俺は、離れなければいけなかった。なのに気づいたらもう彼の手中におさめられていたなんてね。

髪を梳く手を頬に滑らせてみた。若くて水々しい、少年の、まだ男子と呼ばれる者のそれだった。

そうだ、たった3つ、されど3つ。変わらないと思っていたのは間違いだったなぁ。 彼ばかりが、変わっていたのではなかったのだ。俺も、同じく大きくなったのだ。 男子と男、同じなのに、こんなにも違うのってなんでだろね。

少年よ、大きくなれ。

赤と花

時は江戸。
私は、燃え盛る火に恋をしています。それは、町のはずれにある、鍛治場の火で、いつもごうごうと、まるで、生きているかのようにうごめいています。それは、刀鍛冶である彼の火で、彼はいつも汗を流しながら必死に刀を作っています。私には、刀の知識はてんでありませんから、歪みなどというのも分からず、どうしてあんなに綺麗な刀を折るのか、さっぱり分かりませんでした。

私は、町の蕎麦屋で、女将さんの手伝いをして暮らしていました。女将さんはとてもいい人で、幼い頃に両親を亡くした私を、親代わりになって育ててくれました。女将さんは、私を本当の子どものように育ててくれました。子供が産めない体らしいので、尚更でしょうか。
今では私も大きくなり、もうそろそろで、結婚相手を見つけなければいけない歳になっていました。別に、行き遅れだと言われてもいいのですが、ここは一つ、どどんとお金持ちに気に入られて、少しでも女将さんの生活を楽にしてあげたい。と思うのが本音なわけで、これは私の最大の孝行である、と考えるのでした。
だけれども、やっぱり、あの刀鍛冶の彼の顔が、彼の燃やす火が、事あるごとに頭に浮かぶのです。彼はよくここに蕎麦を食べに来て、それで、たくさんの面白い話しを聞かせてくれます。良い鉄を探しに、他の土地へ行った時の事、作った刀を何処かの屋敷の主人に大変気に入ってもらえた事、夏場に水浴びをした川でなぜか金魚が泳いでいた事。彼の口から紡がれるそのどれもが、とても美しく、きらきらとして、私を惹きつけるのでした。
さらに、彼の抱えている秘密を私だけが知っているのです。誰も触れないそこに、私だけが…。それが余計にこの恋心を滾らせるのです。

彼の秘密というのは、本当は、何処かの城主の息子だということです。しかも、家を次ぐはずの長男だと。しかし、彼らの城は落とされてしまい、乳母が何とかしてまだ小さかった彼を連れて落ち伸びたそうで。見つかってしまえば殺されてしまうだろう、と彼は言っていました。そんなまさか殺しにはこないでしょう。と私が言ったのに対して彼は、家の宝を乳母が一緒に持ち出し、その宝を俺に託した。自分の城はその宝を狙われ、抵抗した挙句に落とされたのだから、きっと見つかれば殺される。と言いました。私はただの町娘ですから、詳しいことはよく分かりませんが、とにかく大変なのだという事だけは分かりました。
その話しは、私が一人、丘で花見をしていた時、偶然彼がやってきて、それから少しばかり話しをして、花に惑わされて思わず口から出た嘘の話しとして先の秘密を聞いたのでした。彼は嘘だと言っていましたが、嘘だとは思えませんでした。

だから私はその時に決めたのです。彼に恋をしてはいけないと。近くにも別れが来るかもしれないなら、彼が毎日向かい合っている火に恋をしようと。刀は、人を傷つけてしまう、だけどあの

火は、刀さえも包み込んで、力強く、けれど優しく燃えている。それはまるで、彼自身のように思えて…それだけで私は満ち満ちた気持になれるのだから。

赤と花2

私は、時々ではありますが、お手伝いの合間を縫って、彼の仕事場へ行きます。今日は差し入れを持って彼の元へ。そのついでに、私を愛する事のない、愛しい火に媚びても売ってこようか。
「なーんてねっ。」
自嘲気味に笑って、カラコロと下駄を鳴らしながら、彼の仕事場へ歩を進めます。
仕事場に着くと、実介(さねすけ)さーん。と、彼の名前を大声で呼んでみました。するとすぐに、入ってこい。と返ってきました。私は奥の方へ行きました。彼の仕事場の入り口は、鉄やら使えそうな物やらへんな物が乱雑に積み上げられていて、真夜中に誰かに取られてしまうんじゃあないかといつも心配になります。
彼は仕事場とつながった母屋の土間で、のんびりとしていました。
「女将さんが団子を作ったので、持ってきました。確か実介さん、餡子がついてる団子お好きでしたよね？」
「あぁ、好きだ。」
そういって早速…と、彼は包みをあけて、団子を口にいれました。
「お前は手伝わなかったのか。」
「私は店の方にいたので。」
「残念だ。」
「ほんとに！一人でケチケチ作らないで、私にも手伝わせてくれたっていいのに。ねぇ、そう思いません？」
「そうか、そうくるか。それは、そうだろうな。まぁいい、ありがとう、美味しい。こんなところでは勿体無い。外で食おう。」
なんなのでしょうか…。彼は一人納得して、口の団子を飲み込んだ後、私の背を押して外へ行きました。食べながら話すのはお行儀が悪いですよと、言うと、そうか。と言って、今度は歩き食いです。全くもって、呆れた人です。
彼のお気に入りの、町を出て、少し行った所にある小川のほとりへ行きました。私は川よりも、丘の方が好きなのですが、彼は仕事柄毎日熱い所にいるので、水が流れる涼しい所が好きなのだそうです。
そこで他愛のない話をしながら、団子を頬張りました。といっても、団子はほとんど彼のお腹に収まったのですが。
「次はお前も手伝えたらいいな。」
「そうですね、そしたらまた持ってきます。」
「ああ、そうしてくれ。味はあまり期待しないでおこう。」
「あら、私こう見えても女将さんの一番弟子なのですよ。きっと一人でだって作れますよ。」
「そうなのか？だったら今度はお前が作った団子が食べたい。」
「ふふ、任せてくださいな。」
その時の、彼の笑顔と言ったら、美しすぎて、胸が高鳴りました。……これではまるで彼に恋

をしているようではないか。
それから昼寝をした後、小川に沿って町へとゆっくり歩き出しました。彼は私を蕎麦屋まで送り届けると、用事を思い出した。と言って、町の外へと出かけようとしました。日が暮れかけているから今からだと危ないのでは、と言いましたが、近隣の村に道具を届けに行くだけだ。と言っていたので、それならばお気をつけて、と彼をそっと見送りました。

　それきり彼は、帰ってはきませんでした。私はなんとなく、彼を見送ったときに、帰っては来ないだろうな、予想はしていました。

　だって彼はその日、団子を食べ終わったあと、昼寝をしている私にこっそりと、「好きだ。」なんて戯言を吐いたのです。正しくは、眠りに落ちそうな時でしたが。彼はてっきり寝ている。
と思ったのでしょうね。私はそれを、私の中で聞いていない事にしました。薄々私は彼が私の事を想っている事は気づいていましたが、想いが届かないはずの、届いてはいけないはずの彼が、私の事を想ってくれている事をはっきりと認めてしまえば、私が愛するあの火は？一人ぼっちになってしまう。

　そう、私はいつの間にか、彼の変わりだったはずの火を、本当に愛してしまっていたのです。なんと、馬鹿らしい。

　狂った女になってしまったなぁ、などと思いながら、そう言えば、私は女将さんの一番弟子でも、私の作る餡子は究極に甘く、それこそ悪い意味で頬っぺたが落ちてしまう事を思い出し、大声で笑った。

赤と花3

私は、彼が何となく帰って来ない事が分かっていましたから、彼を送ったその日から、仕事場の火が消えないように、火に薪をくべ始めました。彼の仕事場は小さかったので、大体の作業を一人でやっていたようです。とにかく私は刀の作り方なんて、さっぱり分かりませんし、設備の名前なども分からなかったので、なんとも言えませんが、とりあえず、火が消えなければなんでもよかったのです。
彼が火を消して行かなかったのは、私にあの火を残した、と考えてもいいのでしょうか。それとも、偶然なのでしょうか。（はたまた火は消さないものなのでしょうか？？）
そして、私はいつしか蕎麦屋の手伝いをする事をやめ、結婚などという事を考えなくなりました。村の人々は、私が彼の事を思い、彼が帰ってきたならばすぐにでも刀を打てるように火を守っているのだ、なんと健気なんだ、と言っていますが、とんだ見当違いで。
私はただ、この火を愛している、それだけなのです。それだけ。

彼がいなくなって三月ほど経ち、私はすっかり、火といるとこに慣れました。毎日何をするでもなく、ただ火を見ながらぼんやりするのです。それがたまらなく幸せなのです。

ある夜、私が微睡み始めたころ、じゃり、じゃりと誰かの足音が聞こえました。女将さんか誰かだろうか。大して気にもせず微睡んでいると、「おい、起きろ。」と、聞き覚えのある声が聞こえたので、私は微睡んでいるのではなく、これは夢なのだな、と思いました。もしくは夢の中で微睡んでいるのでしょうか。だって、彼の声が聞こえたのですから。
それから彼は未練ある男の言葉を吐き出し始めました。
「まったく、お前はどうして…。あぁ、くそ。かわいい、かわいい。このまま連れ去りたいものだ。」
そして、彼は私の頬に手をそえました。

「きっと、きっとまた会える。それまでの別れなんだ。なぁおい、俺は辛い。起きろ。目を覚ませ。」
彼の声がとても悲しい色になっていくものですから、私はたまらず、「はい。」と答えてしまいました。彼は私の体をそっと抱き寄せて
「あの時もこうして、起きていたのだろう？知っているぞ。だから言ったのだ。…お前、もう火なんて消してしまえ。」 と頭の上でそんな事をささやきました。……この男、何と、馬鹿なことを。

私がこれから、離れられるわけがないでしょう。それにね、私が朽ちたときは、この火もそっと朽ちてゆく。そんな気がするのですよ。そのときは、冥土の土産と言ってなんですが、団子を持って行きますから。甘い餡子が乗った団子。とびきり美味しいので頬っぺが落ちますよ。

私は言葉にしたのか、心で思ったのか分からなかったのですが、彼には確かにそれが伝わって、
「そうか、なら、　　。」
と、彼は最後に一言、私の耳元でそう言い、それ以上何も言わず、私を抱きしめたままでした。

目を開けると、私はいつものように、仕事場の汚い地面にむしろを敷き、その上に麻布一枚を体にかけた状態でいました。やっぱりあれは夢だったのです。

「ねぇ、貴方の言葉は、私には届いちゃあいませんよ？」

赤と花4

私はそれから火に薪をくべました。パチリとはぜて、火の粉が私の手にかかりました。熱くて手を引っ込めました。

火は相変わらず穏やかに燃えていました。私はそっと火の中に手を入れました。
なぜだか、触れてもいいような気がしたのです。
じり。と嫌な音がしました。しかし、不思議と熱くはありませんでした。

それから、燃える薪を火ごと抱き寄せました。…暖かい。それからは確かに彼の香りと、温もりが感じられました。

なんだ、こんなとろこに、貴方はいたの。

じりじりと、肉の焼ける匂いの中、始めて彼を腕の中に感じました。

これはすべて、貴方だったの。刀も、この火も、すべてが貴方。貴方を、貴方をたらしめる為の。

私は、火の中に彼を見て、確かに彼を愛していた。刀という彼を拒絶しながらも、火という彼を、受け入れた。それが私の想いのすべて。形に、なっていた。

涙は、あっという間に、蒸発して流す事はできなかった。それでも、私は喜びに震えて泣いていた。

空の俺にみせろ。

彼は最後にそう言った。

だから私は魅せるのです。彼に、私という赤い花を。

女と声 ※短々

私は電話をしている。
頭のおかしい人が好きだと言ったら、あんたも頭がおかしいでしょうと言われた。そう言うあんただって、変な事する人が好きって言ってるじゃない。と言ったら、だから私も変なのよ？とあっさり言われた。
「どっちも大して変わらないじゃないの。」

「変わらないから、あなたが好きよ。」
と言われた。

私は男が好きなんだけどなぁ。

親友の報われる事ない恋を知って、私は静かに涙を流しながら、そうなの、私もあなたが大好きよ。と、ふざけた声で返事をする。彼女も、君の瞳に乾杯。なんて、はぐらかされているのを分かりながら、それに乗ってふざける。

報われないと知りながら、貴方は私にいつまで恋をするの？？

そうやって彼女の事を思うのが辛くて、むしょうに引き割いてやりたくなった。

雄と壁

立場が大きく違うとか、向こうにはダンナがいるだとか、それに加えて年齢差とか、どうしてこうも人間にはしがらみが多いのか。もうちょっと、動物らしく本能的に生きたって構わないと思う。まぁ、人間はほかの動物に比べて色々理性だったり、善悪の区別とか働いたりするから、本能っていうのを抑える事はわからない事もない。でも、自由恋愛とかダメ？昔みたいに一夫多妻制オッケーだったら、男からしたらほんとメシウマだな。だけど、女からしたらメシマズな状態ですが。ってゆーか、この表現自体がもうすでに…ないな。

つまり俺は、最初にあげたようなしがらみに囚われた恋、そう、しがらんだ恋と言うやつをしているわけだ。
お相手は、23歳女性、職業は教師。つい去年結婚したばかりの新婚さんである。
と言う事でおわかりいただけただろうか。ではもういちど。
彼女は高校の先生であり、俺の数学の担当をしてくれている先生でもある。
もうお分かりいただけただろうか。先ほど挙げた例にすべて当てはまっていて、どう考えたってそりゃ無理だろう、と言わしめたる、無謀とも言える恋を俺はしているわけである。さっきの例はわざとじゃあないかと言われれば、そうでもあるが、だいたいはそれが代表格であろうと俺は思っている。
第一俺は真面目に先生が好きなのだから、そんなしがらんでようと、そうでなかろうと関係は無い、しかし出来るだけならなかった方が良いに決まっている。

話は変わって、俺は昔からよく人を不快にさせるのが上手いと言われる。別に俺は普通に生きているのだが、時々ふっと自殺しそうだったり、危ない事をしでかしそうだったり、そんな気配がするらしい。だからだろうか、友達と言うものは、生まれてこの方できた事がない。別に居なくても不自由はなかった。二人一組になって何かをするときでも、俺はいつも余ったが、余ったのだったらやらなくて良いって事で、ラッキーと教室からポンと飛びだしてしまう奴だし、別に外に遊びに行きたいと思わないし、それに何より、人といる事がひどく面倒くさいのだ。
そんな俺は、学校で不良とも、真面目とも、オタクとも、何であるというレッテルを貼られる事はなく、浮いてるような沈んでるような、まるで水死体のごとき存在と化していた。物珍しさに俺に近づこうとする男女はいたが、返事がリアルに「うん。」とか、「すん。」でしか返さないので、そんな奴らも10分も経たぬうちに俺の相手がいかに難しいかを悟って何処かへ消えるのだ。本当に消せるものなら消してしまいたいが。

そしてそんな俺が、恋をしたのだから一大事だ。

雄と壁2

俺が先生を好きになったきっかけは、何て説明しようかな。そう、去年…2年生の一学期、体育の授業を抜けて、体育館裏の日陰でアイスを食べていたときだった。そこに、先生がやってきて、サボりはいけないだとか、授業に戻れだとか言ってきた。俺はそれに全部、「うん。」とてきとうに答えていた。先生はそれから俺に色々質問してきた。好きな教科は？好きな音楽とかある？本とか読むの？それも全部うん。で答えていた。いい加減早く飽きてくれないかと思って、俺は返事をしない事にし、先生に話すだけ話させていた。そこで先生が、
「ねぇ、死んでみたい？」
と俺に聞いてきた。それはまるで、理科の実験をするかの様な軽さを含んでいた。
だったら殺してくれるのか。と心の中で思うと同時に、思わず口に出してしまっていた。それからはもう仕方ないと思って普通に話をしてやった。

「じゃあ、殺してくれるの？」
「死にたいの？」
「さぁ、どうだろ。先生は殺したい？」
「どうかなぁ。別に誰かを、ってわけではないけど、一回くらいは思った事ない？」
「いや、人に興味ないんで。」
「君ほどじゃないけど、私も興味ないんだよね、だからかな、勉強だけしてたら、いつの間にか先生になってた。」
「勉強にも興味ない。」
「でも、高校には入るくらいの頭あるって事はやっぱり少しは勉強したんじゃないの？」
「ここ県一の馬鹿じゃん。」
「先生はそんなこと新任だから知らないよ。馬鹿なんだ。そうなんだぁ。ふーん。じゃあ私は馬鹿な先生だからここの学校進められたのかな？」
「確かに、一緒にサボるあんたは馬鹿だ。」
「漫画みたいだね、ちょっと青春してる気分」
そう言って先生はクスッと笑った。

全部、漫画だよ。生きてることも、勉強も。そう言ってやりたかった。けれども、久々に話したせいか喉がすごく渇いて、声にする前に喉で消えた。ここでようやく、アイスが溶けていることに気がついた。
空を見上げた。久しぶりに見た気がした。憎たらしいくらいに青くて、そこには自由があった。それでもこの体育館裏にも、自由は確かにあって、そして俺の隣にはもしかしたら俺を殺してれるかもしれない人がいて、死体の様な俺をこれ以上殺す事なんてできないと思うけれど、せめてぐちゃぐちゃにして海の一部にはしてくれる。
無性に体が暑くなった。渇いた喉を潤したくて、俺は静かに立ち上がって、「一緒にサボった事

言われたくなかったら、飲み物奢ってよ。」と、渇いた喉から声を無理やり吐き出した。

たったの一年とちょっと前の話なのに、あの時の自分は若かった。などと、生徒たちが英語のスピーチ発表とやらの練習で、英文を暗唱をしているのを横目に見、緩んだ口を隠すため、腕を枕に机に突っ伏して寝る事にした。もう入試も終わったのに、勉強する必要なんてないでしょ。
卒業まで後少し。結局俺は先生に殺される事なく、死体を海に漂わせている。腕の隙間から、窓の外に見える、蕾をつけ始めているであろう桜の木を、ギッと睨んだ。カレンダーよりも何よりも、桜というものが春を迎えた事をありありと示していて、それがひどく、ムカつくのだ。

ねぇ先生、興味ないならどうして俺にあんなにしつこく話しかけたの？

雄と壁3

そうしてとうとう、卒業の時を迎えてしまった。高校、なんてものに大した思いでもなく、下手したら去年の夏までの記憶は抜けているのではないのか。と思うほど何もなく、ただ覚えていたのは先生の事と、ムカつくあの桜の形、それと食堂のご飯の味と、人工的なアイスの味。だいたいそれくらい。皆は笑ったり泣いたりして、親や友達、世話になった先生などと、忙しなく写真をとりあっていた。俺の親は来ていない。親に「来なくていいよ」と言ったら、あっさりと、分かった。と言われたのだ。別にそれがどうとかいうわけではないのだが、あの親も、もしかしたら若き日は死体だったのかもしれないと想像して、なんだかおかしい気持ちになった。
最後に一目でも先生を見ておきたくて、キョロキョロと、頭と目だけを動かしてその姿を探した。すぐにわかった。先生は、長くて真っ直ぐな黒髪で、背は高く、背が向日葵のようにスッと、天に向って伸びている。その姿ばかりを見てきた目に、わからないはずがなかった。たくさんの生徒に囲まれて、たくさんの写真を一緒に撮って。俺はその中にはどうしても、入りたくはなかった。だから、離れたこの場所から、カシャ、カシャ、とその姿を安い音を鳴らす携帯のカメラで収めた。何枚も、何枚も。一目なんて、無理だった。

バシャッ！！

突然隣で大きな、何かを撃つような音が聞こえた。
背の小さな女生徒が、ボロボロと涙を流しながら、立派なカメラを構えて、俺と同じ景色を撮っていた。…これも、また、ここから離れる一人なのか。そしてそれは、カメラを構えたまま、口を開いた。始めは独り言かと思ったが、どうやら俺に言っているらしかった。そしてその口から突如、俺への愛が零された。
「先輩、好きです。」
と。しかし、俺は告白された事よりも、これは後輩であるらしく、そう言われれば確かに見覚えのない顔であるけれども、俺の覚えている顔と言ったら、今まで席が隣になった奴しか覚えていない事に気づいて、そっちの方がどちらかと言えば、驚くべき事であった。
俺はその、泣きながらカメラを構える女生徒の顔を見た。覚えられそうにもなかったので、また顔をそらした。隣では、相変わらずの嗚咽と、何かを撃つようなシャッターの音が響いていた。俺はふと気まぐれに、
「お前は俺の見る景色を見たいか。」
と聞いてみた。もし違ったら勘違いも甚だしい所だが、何となくそんな気がしたのだ。思ったとおり、それはコクリと頷いた。

「これが俺の見ている世界だ。」
シャッターを押す。バシャッと大きな音がなる。あまりうまいものではないが、しかしこれこそが間違いなく俺の景色なのだ。カメラを返すと、それは慣れた手付きで写りをチェックした。画

面には、彼女の撮ったものがいくつも映され、そして最後には俺の撮ったやけに汚ない一枚が映し出された。ピントもなにもあったもんじゃない。
「先輩は、こんな景色を見ているんですね。ふふ、私と全然違う。」

それから女生徒は、カメラを肩にかけ、俺の頬を、小さな両手で包んで「泣かないで。」と言った。
すぐに泣き止むよ。と言おうとしたが、喉が閉まって声が出せなかった。苦しかった。
目からは海水が流れて、まるで海に溶けているようだった。

先生は、ほんとに水死体の俺を殺して、海に戻してくれたのだ。
なんて事だ。まさか先生もこんなつもりで言ったのではないだろうに。
春の暖かい風がビュウっと吹いて、先生の髪をなびかせた。目があった。

春がきた。春がきた。どこに来た。
たしかに、ここにいる。

君と死ぬ

父と、母が、愛し合った末に出来上がった物、それが自分、という事ならば、つまりは二人の愛の形だという事になるだろう。ならば、その二人の愛が消えてしまえば、自分も消えるのか、と言われればそうではないが、愛の残骸と言う物に変わり果ててしまうのは間違いない。であるからして、存在理由は特になくなってしまうのだと思えなくもない、そして下手をすれば愛と履き違え、肉欲を求めて性行した末の淫らな産物になる可能性も否定はできなくなり、さらに存在理由など皆無になってしまうのだろう。
そんな事を自分は時々考えてしまう、そして誰かに愛されたいと思う。愛さえあれば、自分の存在が許されるような気がするのだ。自分は、二人の関係が、むしろ家庭などとっくに崩壊してしまっているのに、己の体裁を繕うために離婚しない両親の元で寒々しい空気を吸ったり吐いたり、ただそれだけをして生きている。そんな状態は自分が小学3年生のときからずっと続いていた。世間体と、自分と、金の事しか考えられない最低な両親の元で育った自分の性格はいつの間にか捻れ、ひしゃげ、完膚なきまでに叩き潰されてしまった。そして嘘の性格と言ったらいいだろうか、そういう物が出来上がってしまった。

そんな自分の中で、たまりにたまった物が爆発し、高校が嫌になり、自殺未遂…という派手なパフォーマンスをし、一花咲かせて辞めた。普通に辞めたとしても、いつしか誰の頭からも消えてしまう、大人になってもふっと思い出せるように焼き付けてやりたいと思ったのだ。だから、自分は高校の屋上から飛び降りて見せた。下にはプールがあるが、それがあっても死ぬかもしれなかった。飛び降りた瞬間、死を感じた。一か八かだった。それで死ぬなら、それまでの命だと思った。ところがどっこい、自分は無事に生きている。自分は生きる運命にある、生きなければならない、そう思った。どうでもいい自分の命を、大切にしなければいけないとは、なんとも難しい事だ。

それから、家を出てバイト漬けの毎日を送る事にした。世間体を考える親は、自殺未遂をした我が子の心のケアをするためと称し、快く部屋を借りてくれた。しかしそれは、実質上の絶縁だった。自分は親のように、狂ったように金を求めた。バイトも死ぬほどしていたが、人と寝るだけで金がもらえるなら楽だと思い、誰彼かまわず寝た、寝た、寝た。そこにはわずかな愛も生まれず、小汚い快楽と金だけがあった。正直、3ヶ月も持たずに自分は狂ってしまう。と思ったのに案外イケた、人間やればできるもんだと悟った。
自分の生活を説明するならば、朝、目を覚まして、顔を洗ってバイトに行って、終わったら夕飯を買って、食べて、寝て、しばしば誰かとまぐわる、と言う意味で寝て、それからまたその繰り返しだった。生きて行く上での必要最低限の事と、バイト、それから誰かと寝る事。それだけが、自分の全てである事が、悲しかった。

いずれは爆発するだろうと言う事は想像できた。

君と死ぬ2

しかし奇跡的な事に、さらに半年も爆発せずにいた。まだ大丈夫そうだった。そんな自分に感動した。今世紀最大の感動を自分にありがとう！！バイトが終わって疲れた体をベッドに横たえて休ませていた。残念な事に、自分は不眠症という厄介な症状を抱えているため、体を休めたくても寝れないのだ。疲れていても、眠れない。
別に見もしないテレビを付けっぱなしのまま、目を閉じて、深く、息をする。埃っぽい空気で、気に食わなかった。玄関から折りたたみの椅子と、サンダルを持ってきて、ベランダへ出た。肌寒かった。椅子に座り、空を見上げた。やや都会と言えども、余裕で空に星を見る事ができた。今度は、外の空気を思う存分肺に吸い込んで、吐いた。冷たい、心地よい空気が肺に流れ込んで、ささやな眠気がやってきたような気がした。

カラカラ、と隣から窓が開かれる音が聞こえた。確か、隣は大学生さんだったか。「こんばんは」薄い板の向こうから声が聞こえた。どうやら隣人も私が窓を開ける音が聞こえていたらしい。何と薄い壁だ。「どうも。」と返事をした。そう言えば、これがこの隣人との初会話だったような気がする。引越しそばなる物を持って行った気がしなくもないが、まともに話したなどとは言えないだろう。あんなのはだいたいマニュアルがあるようなものだから。

カチ、と音がして、ほんの数秒後、白い煙が少しだけ見えた。煙草の匂いがした。しかも、メンソールの。ぼんやりとどんな顔だったかと思い出そうとしたが、たしか可愛らしい顔をしていたな、くらいにしか思い出せなかった。
「今日は、少し肌寒いですね。」
そう言って隣人が部屋の壁よりもさらに薄い、ベランダを隔てる板の向こうから話しかけてきた。やはり今日は肌寒いらしい。ニュースではそんな事を言ってなかったが、だいたいは当てにならない。
「そうだね。」
「煙草でも吸いますか。」
スッと壁の向こうからこちらに煙草が差し出された。その手はとても細い手首から薄い手のひらが生えていて、これまた細く骨ばった指がそこから生えていた。ずいぶん綺麗な手だなとおもった。ぼんやりと頭にある可愛らしい顔つきの隣人が、煙草を吸う事実は、少し意外だった。
「未成年に煙草すすめてどうすんの。」
と口でいいながら、手では差し出された煙草をつい、と摘まんで、唇にあてがった。それかそれを咥えて、 ついでに差し出されたライターを受け取り、火をつけた。
ふぅぅ、と口から細く吐き出された煙は、ゆらりゆらりと空(くう)を彷徨い、いつしか消えた。こんな風に自分も空になれたら、どれだけ楽だろうかと考えた。

この日から自分が、そして隣人が、お互いの顔を見るでも見せるでもなく、同じ煙を燻らせながらベランダの薄い板越しに話すようなった。

君と死ぬ3

知らない人と、まぐわる。ガタガタとベッドが揺れる。あぁ、この音は、右の隣人に、そしてよく話す左の隣人にも聞こえて居るのだろうなと思って、笑いそうになった。行いが終わって、お金をもらい、さっさとシャワーを浴びさせて帰した。身体中が汗と、精液でベタベタと気持ち悪く、だけれども、だるくてシャワーを浴びる気すら失せてしまって、自分の棒のような体を、これまたベタベタと気持ち悪いベッドに投げ出していた。

女とも男とも自由にまぐわるこの体。一体何人抱いて、そして何人に抱かれただろうか。数を数えてみようと思ったけれど、数えれば数えるだけ虚しくなると思ってやめた。

重たい体をぐっと起して、シャワーを浴びた。とんでもなく面倒くさかったので、ほんの濯ぐ程度で終わらせて、脱衣所に置いてあるバスタオルでてきとうに体を吹いて、部屋に戻って下着も着ずに裸の上にスウェットを着た。
床にごろりと寝転がった。汚いベッドに寝転がるよりも、百倍マシ、硬さなんて問題ない。それなのに余計にだるさが増した。イライラして煙草が吸いたくなった。いつものようにサンダルと折りたたみの椅子を持ってベランダへ行き、ゴツンと力強くベランダの板を叩いた。するとすぐにカラカラという窓が開く音がして、隣人が「こんばんは。」と言って出てきた。自分と隣人は、お互い話したいときや暇なとき、こうして板を叩いて相手を呼ぶ。気まぐれに、窓の開く音がしたら出てみる、なんて事もある。
しかしただの一度も、ベランダ以外で話した事はない。アパートの玄関先、駐輪場、ゴミ捨て場や、近所のコンビニで会ってもおかしくはないのだが、それがまるで運命のように会う事はないのだ。別にお互いの顔なんて見る必要はないのだろう。
隣人が、煙草とライターを、板の向こうから差し出してくる、これもいつもの事。煙草を咥えて火をつけた。メンソールのスっとした感じが口の中に広がった、まぁどちらかと言えば、口の粘膜にこびり付くような感じなのだが。ライターを返して、ゆっくりと煙をはいた。話し出すタイミングは何となく。思い立ったときに口に出す。話さないで部屋に入る時も時々あった。
「いつもうるさくしてごめんね。」
「いえいえ、お気遣いなく。」
「今日のはしつこくて。」
「相手はどちらで？」
「女。」
あっさりとした短い言葉での会話。
自分は性格が本当に悪い。悪いから、男女関係なくたぶらかし、寝て、金をもらう。年齢も関係ない。高校の時にできた友人からくるメールや電話にも嘘ばかりで返していた。しかしこの隣人には、嘘などは吐かなかった。同じ空間にいながらも板で隔てられていて、それがちょうどいい距離感で。もしかしたら、今も口から吐き出している煙草の煙は、自分の中の嘘とか、絶え間な

い汚い欲だとか（例えば人を殺したいとか）を絡め取って、体外に排出してくれているのかもしれない。

　お互い知っているのは、声と、手と、それから少しの秘密だけ。
充分だ。

君と死ぬ4

ざあざあ、と雨が激しく降っている。今日はたまたまバイトが休みで部屋でのんびりとテレビをつけて見ている。だんだん飽きてきて、何処かへ行きたくなった。だけれども、雨が降っている外などには行きたくない、濡れて不快な思いをするのは目に見えている。こんなに暇だとやばい。
どうしよう。

「死にてぇ。」

何故だか自分は昔から、と言っても中1くらいからだが、どうしてか、やる事がなくて、自分の中が本当になにも考えない空っぽになった時、死にたい。と思うのだ。それは別に辛いだとか、苦しいだとかいうものでもなく、自動的にそんな事を思うわけだが。そう言えば最近バイト先の先輩から、あらゆる欲を棄てきった僧でさえ持っている欲、それは生きたいと言う欲、「生欲」と言うのだろうか、それを棄てるため、最終的には土に埋まって死ぬ、という修行をしていた人たちがいた、という話を聞いた。もしかしたら自分は、それで死んだ僧の生まれ変わりで、本能的にそう思っているのかもしれない。と思った。
けれども自分は欲なんて棄てきってなどいないし、どちらかと言えば欲なんて腐るほどあって、それに、死にたいと思うのも一つの欲だと思うが、それはどうなのだろうか。

ゴツン！雨の音とテレビの音に紛れてはいたが、ベランダの方からは確かに壁を叩く音が聞こえた。自分はサンダルと傘を持ってベランダへ出た。
「雨だよ。」
そう言ってやった。返事は返ってごず、一体どうしたものかと思った。板の向こうから手が伸びてきた。その手に煙草はなかった。今始めて言うが、自分たちが煙草のやりとりをしていたのは、板の上からではなく、横の方からだ。もちろん、今そんなところから手を出しているのだから、隣人はさぞかし濡れているであろう。
自分は意味がわからずその手をずっと眺めていた。何もかもが細いその手が今にも力なく崩れそうな気がした。自分はその手を、握ってみた。冷たかった。
「おい。」
声をもう一度かけてみた。今度も返事がなかった。本当にもうわけが分からなかった。
「死んでる？」
そう聞くと、生きてますよ、というように、手を緩く握り返された。

「こっちにこい。」　声が、重なった。

それから、しばらくの沈黙。雨の降る音と、傘に雨が当たる音と、お互いの息づかい。それだけ。この握った手をどうしよう、どっちが先に動く？沈黙に耐えかねて、もう一度「こっちにこい。」と言った。返事は無かった。
ずっとこのままの状態というわけにもいかない。手を離して、ぐっと足を後ろに引いた。このままこの板を避けるようにベランダの手すりをつたって向こうに行けばいいと思ったが、下手すると落ちてしまう。それに少しだけ、めんどくさい。思いっきり薄い板を蹴り抜いた。案外簡単に壊れて、勢い余って突き抜けた先にあった隣人の足を蹴った。すねを蹴ったようで、向こうはかなり悶絶していたが、返事をしないお前が悪いのだと、もう一度つつく程度に蹴ってやった。
「痛い。」
「お前が悪い。」
「ひどい！」
「ひどくない。」

板をこえて向こうに行って、それから二人、腹を抱えて笑った、腹の底から笑いがこみ上げてきて、死ぬかと思った。一通り笑ったあとに、もう一度手を繋いだ。目の前の人は、服や髪や肌がびしょ濡れで、水がポタポタと滴っていた。ベタではあるが、泣いているようにも見えた。気のせいではあったが。ベランダにずっと居るわけにもいかないので、隣人の部屋に入った。
それから隣人は着替えて、それから、向かい合って座った。気まずかった。顔をチラリと見た。向こうは気づいてなかった。想像通り、と言うか、記憶通り、なかなか可愛らしい顔をしていて、むしろ顔の作りから体型まで大体が記憶の通りで、それを自分は想像だと思っていた。自分の記憶力は意外にいいんだなと思った。それと同時に、今まで板の向こうから伸びてきたあのか細い手首や、薄い手のひら、長い指がこの人の体の一部としてやっと収まった感じがした。

そう言えば、名前を知らなかった。そう思ったが、今更知ったところで、何も変わりはしない事を思い、聞かない事にした。
隣人の部屋は、ほとんど何もない自分の部屋よりもさらに何もなく、生活に必要なものをさらに削った物、と表現したらいいだろうか。本当にそれくらいしかなかったのだ。どういう事かと言うと、カーペットはきちんと敷かれている。しかし、テレビがない、ベッドがない、エアコンがない、冷蔵庫は、ジュースしか入らないようなサイズ。部屋の隅には布団と枕と、鞄と、積み重ねられた服。そして、本来机があるはずの部屋のど真ん中には、煙草と、灰皿。その横にゴミ箱。
「変な部屋！！」
自分はまるで隣人をバカにするように言った。

「体売って金作ってるやつに言われたくねぇよ。」
隣人が、自分をバカにして言った。
「うるさいなぁ。」

多分、あの時、板と一緒に自分たちの中の何かも壊れたのだろう。板を壊してこっちに来たのは自分のせいではない。言い訳に聞こえるかもしれないが、アレはなるべくして、なった。そういう事だ。

だから今も、なるべくしてなっている。そうだろう？

君と死ぬ6

自分と隣人は、お互いの顔を見合って、笑った。
「ひどい顔！！作りはいいけどやつれてる。」
「そっちも同じじゃん。」
とうとう、半年とちょっともった自分の中の何かが、狂った。
この感じは、高校を辞めたときのそれと似ていた。今は華を咲かせたいわけではないが、この脳内のピリピリした感じは、まさしくそれだった。スリルを、平凡を逸脱した何かを求める、乾き。
それは、板をこえてこの人の領域に入ることだったのかもしれないし、ああして罵られる事だったのかもしれない。どっちにせよ、今は非凡で、自分はそれを楽しんでいる。そして非凡をさらに壊したいと思っている。
高校を辞めて今まで、自分の事を、可哀想な子だとしか言われなかった。それは同情と言う名の蔑みだった。温かったのかもしれない、沸点などこちらは既に到達していたのに、ずっと温いお湯で温められているような…なんとも言えない、気持ち悪さ。
自分が隣人に心を開いていたのは、ひどくこの人が、冷めていたから。自分の中の、熱く滾る何かを冷ましてほしかったわけではないが、冷たく燃えるこれが、気持ちよかったから。

そう考えると、もともとこの人は、自分の中ではずいぶんと変わった存在のようだった。

今となっては、自分は平凡を愛していたのか、非凡を愛していたのか分からなくなった。
まぁ、どちらにせよ、自分はこの人を愛しているという事になるが、それはそれでいいんだろう。

「好き。」
そうつぶやいてみた。ずいぶん稚拙な言葉だった。これなら誰にでも吐けると思った。
隣人は、ひとつ、あくびをして
「壊れたね。」
と言った。あの板か、それともこの人自身か、はたまた自分か。

わからない事だらけで…
「嫌になる。」

嫌になったら二人で逃げよう。と、この人が言って、手を握られた。相変わらず細い手首で、そこからは薄い手のひらと、それから生える細い指。今更だけれど、ぷくりと膨れたリストカットの跡。今まで気にも止めなかったけれど、なぜだか気に障ってイライラとして、治りかけの傷を

選んで、そこに、ぐり、と爪を突き立てた。血がごぷりとあふれ出して、手首を滴り落ちていく。
　ぐる、ぐる、ぐる。頭の中でいろんな思いと考えが回る。この人を愛していて、好きでもあるけれど、それだとどこか稚拙で、そして壊れたものは一体何か、全部わからなくて嫌、だけど一緒に逃げてくれるみたい、ところで、逃げるってどこから？誰から？何から？そしてどこまで？こんな、行きずりと言ってもいいほどの関係の自分と、あなたが。そこにある愛は間違いではないのか。でも自分は確かにこの人を……ほら、ぐる、ぐる、ぐる。

「逃げ場はあちらにご用意しております。」
隣人が戯けたように言って、自分の手を握っているのと逆の手で、窓の外のベランダを指差した。

　そこにあったか。逃げ場なら、もうとっくに。ぐるぐる悩む必要なんてないのか。
　あの板をなおして、それから煙草を渡して、なんでもない事を話しながら、二人一緒に空になる。そうして、今から逃げて、あの板が壊れる前に元通り。
　なるほど、そうか。納得だ。
「リストカットの跡も、心の傷も、治そう。」

　そして、数日後にベランダの板はなおされて、自分たちもまた何もない隣人同士の関係に戻った。相変わらず自分はもらった煙草を吸っていて、相変わらず他では嘘ばかり吐いている。
　朝、ゴミを棄てに行こうと、玄関のドアを開けた。それと同時に、隣のドアも開いた。
「おはよう。」
「どうも。」
どうやら、自分と隣人の縁は、つながってしまったようだ。
　朝の玄関先で、大爆笑。ひいひいと息が苦しい。
「やばい、死ぬ。」

君と死ぬ

http://p.booklog.jp/book/41453

著者 : 蟲メガネ
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/gcx1906/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/41453

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/41453

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.